

大日本國開闢由來記

首卷

^ 13
3591
1



門 13
號 3591
卷 1



大日本皇國
開闢由來記



早稻田大學圖書館
昭和 35.10.12 購
藏 入 書

皇國圖書



大日本皇國
開闢由來記

圖書

大日本國開闢由來記序
大靈寔宇一夢場也。王公
士庶一夢場中之人也。盛
衰興廢一夢境也。笑傲悲
歎一夢境中之態也。前夢
既覺後夢嗣發。古往今來



均是以一夢場之人視息
一夢境之中真所謂大夢
者乎。一夢道人。比歲頻寤
凶禍或忽遇魑魅罔兩魂
褫氣懾或為雷火所擊搏
鎔愕昏顛又或忽大地震

裂身埋沒於黃泉下或乃
海沸河決漂蕩屋舍身葬
於魚腹中苦楚百端覺後
仍毛竦心悸惴惴然不安
猶在魘夢中每寢如此既
已有年憶是耄耄日至心

怯志摧氣體凋瘁上下之
氣否塞不交通之所致乎
嗚呼我既在一夢場中則
夢此凶禍其亦奚怪哉雖
然莊蒙有言夢飲酒者且
而哭泣夢哭泣者且而田

獵方其夢也。不知夢也。且
有大覺而後知此大夢。由
是占之。則凶夢即吉寤。妖
孽即禎祥。亦未可知也。要
之。均是我與彼同在一夢
場中。為一夢中之人。則其

所見所聞俱是一寤境中
之夢乎。今綴此編。喋喋焉。
譚スルモ皇國寶祚之隆。土地
之秀。在四海萬國之上。則
外虜覬覦。不足怖焉。亦是
得非大夢未覺。狂心未歇。

而夢中譚夢者乎。若果如
莊蒙之言。則萬世之後。一
遇真人。興得忽然。破夢而
出。則夢場夢境。與夢中之
人。一切雲消霧散。而日月
星辰。國土山川。神人萬物。



夢の世のゆめをよそと大夢
とていふの夢の世をいふ
と夢の世をいふ人の
人のいふれは

夢の世の
ゆめをよそと
大夢とていふ
の夢の世をいふ
人のいふれは

將與我合為一笑夫然後
始可以知夢境中譚寤之
大夢也耳時安政丙辰歲
冬梢一夢道人自誌於一
夢場中

松雨漁夫書

菅原

心齋

松雨

安 下 以 子 宇 丁 乙

日本國開闢由來記
 目次
 編中所記神人出像
 景行天皇御宇徑槁僵歷木上往來國
 歷木非扶桑木辯
 凡例
 卷一 第一
 藪雲神劍出現世間永護國家
 大少二神經營天下建鴻業基
 卷二 第二

計 丁 乙 子 丁 乙 子 丁 乙 子 丁 乙

多 下 知 下 都 丁 丁 丁

經津主武雷二神能定君臨地
 授平國之廣茅退幽冥爲保護
 第三
 神器照世間寶祚與天壤無窮
 朝木花開耶媛證靈威於產室
 卷三 第四
 依東征功績恢弘天業於宇內
 背負日神之威隨影壓躡賊虜
 第五
 志存必克誠軍將戰勝自夸者

天 丁 丁 丁 奈 下 下 下

乃 以 波 命 比 命 不 命 亨

饒速日能知天人際帥眾歸順

卷四 第六

開掖庭於檀原地八紘咸為宇

衢神預卜宮處御裳濯川流清

第七

景行西顧專彈力於驅除平定

小鬢刺賊表德於日本武尊辨

卷五 第八

示威施德邊裔青人草隨風靡

三嘆憫孀傾義靈耀反照暘谷

毛 也 伊 良 加 未 全 保 亨 命 反

由 延 與 良 加 利

第九

留靈於神劍光耿炳於千歲後

八十綱誓不虛坤輿將歸皇化

卷六 第十

世道自逐氣運隨時轉變無住

異域教法為孽後回護我神道

第十一

國家衛氣生隙外虜起覬覦心

八咫鏡放靈光神風覆沒敵船

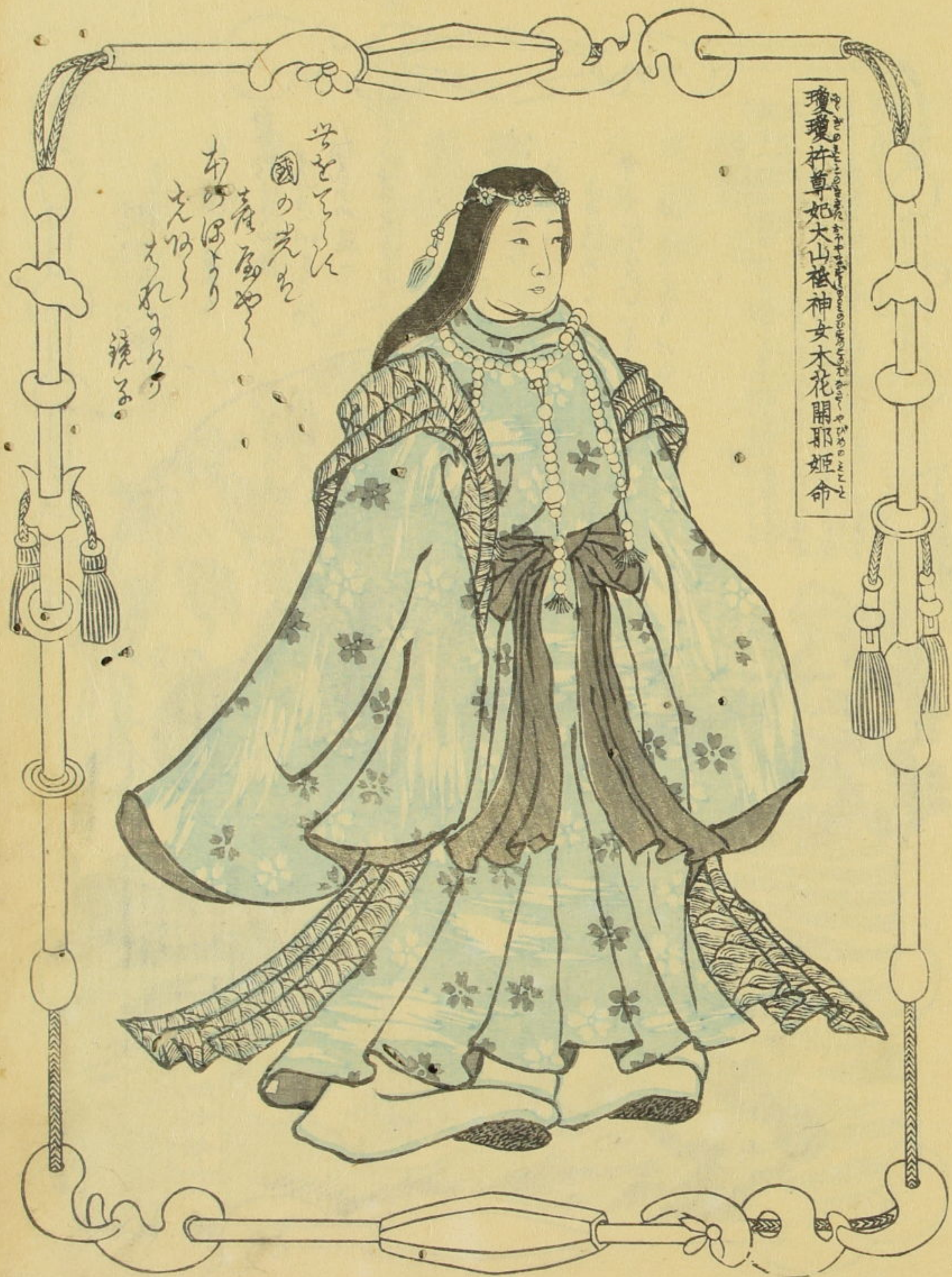
○編末載胡元書牘二狀釋之

宇 惠 表 伊 良 加 利



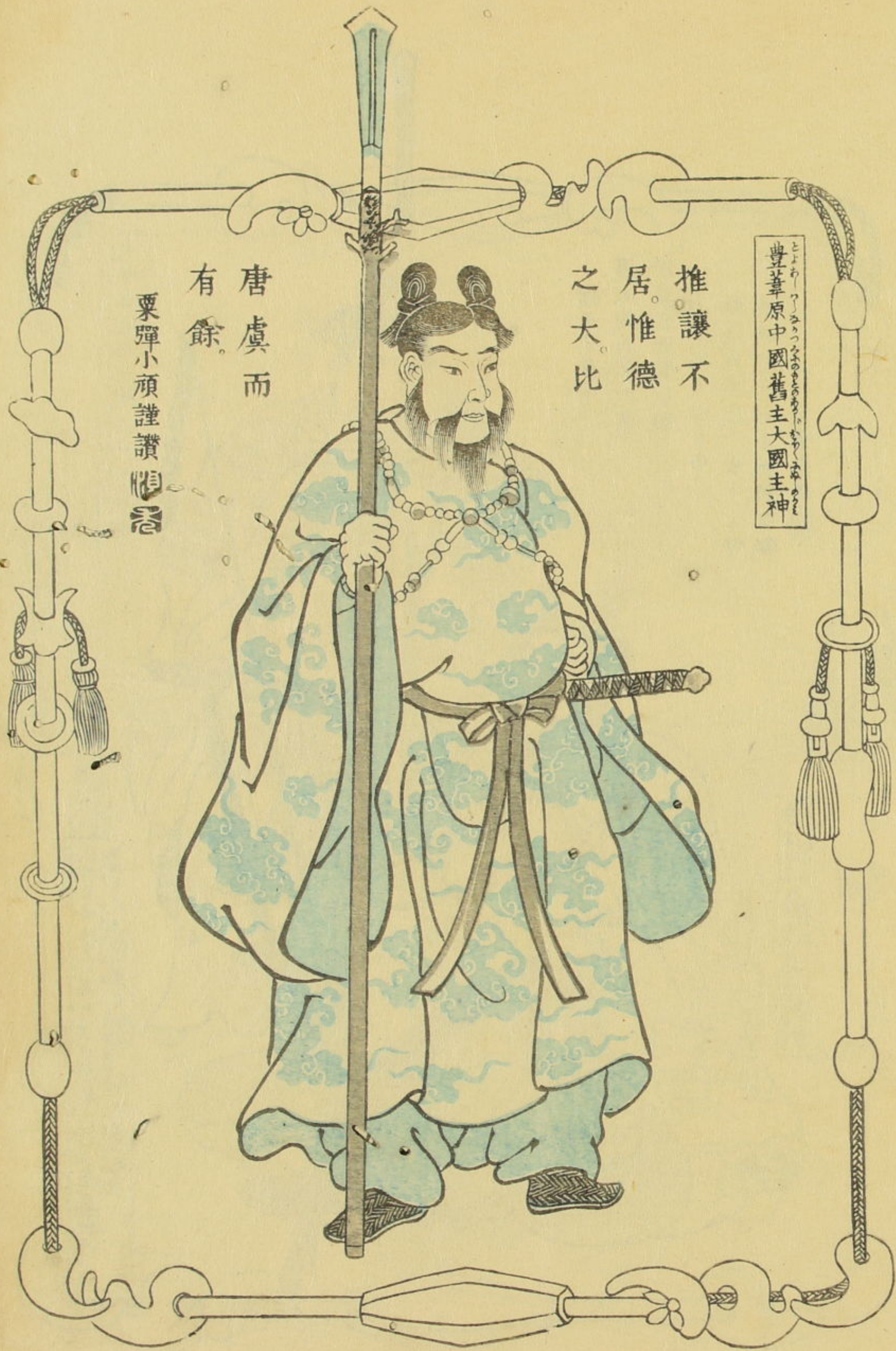
天界の三宮御子傳
 聖太子高彦火瓊杵尊
 尊也
 鷓鴣子謹贊
 王國

天津日高彦火瓊杵尊



瓊杵尊妃大山祇神女大花開耶姬命

母をてんげ
 國の光也
 大花開耶
 大花開耶
 大花開耶



豊葦原中國舊主大國主神

推讓不
居惟德
之大比

唐虞而
有餘

粟擘小頑謹讚



稜田彦大神

菅子

其むくはほ

とほきいさへ

いさへいさへ

まていさへ

さあ

穢潔安敷

いさへいさへ

けむらひ

あはれ

あはれ

あはれ

唐申ハ稜田彦の神を祭るる所ハ源の頭分唐申ト云ハ
歌ハ沖中の得るる所ハ釣船ハ垂也ト云ハ
さら沖中のえさハ崩度申ト物ノ名ト云ハ
あはれいさへいさへいさへいさへいさへいさへ
用ハぬ

天鈿女命



神日本磐余彦天皇
後諡稱神武天皇

易稱聰明睿哲
神武不殺唯文
不殺所以為
神武欽 雀點謹讚

國德のゆかり
あつてこそ
はたのちか
あつてこそ
あつてこそ

神武天皇之皇后章代主神女媛踏鞞五十鈴媛命

九



大伴佐伯西氏遠祖天押日命

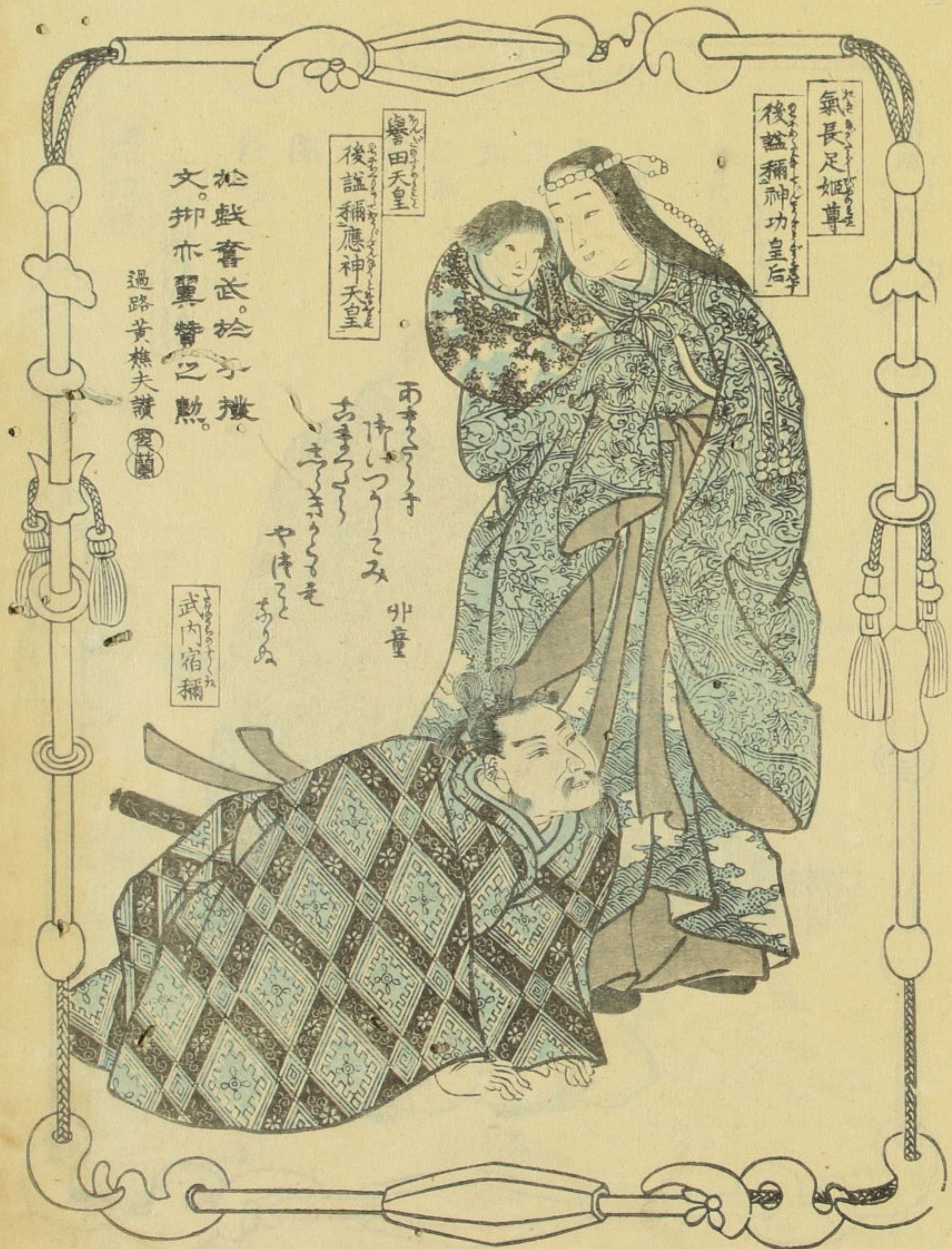
讚天兒屋命
運大鈞而開元摸
於奕世而贊聖讚

讚天押日命
雄志存君國一言千古仰
為將須死終不避龍龜

藤原氏累祖天兒屋命

天押日命在百海行波水濱屍山行波草生屍王乃上
爾去曾死未嘗為自神此一寫開開死自





氣長足姬尊
後謚稱神功皇后

譽田天皇
後謚稱應神天皇

於戲奮衣。於子撒。
文。抑亦翼贊之勲。
過路黃樵夫讚

阿蘇王子
仲しつゝこみ
あまのり
まきまのり
やまのり
あのり

武内宿禰

大伴氏遠祖日臣命
賜名稱道臣命



能出其不意斯可以立
偉効乎談笑之間
信乎兵家之機以至
易行乎至報
羊角題

厩戸皇子
後諡稱聖德太子

清一

圓

好異之

法

乃矚子

不軌之

基

法暎漁史類

如玄園

如玄園



北條相摸守平時宗

唯夫豪邁

英斷之氣

足以興士

志

信乎神風

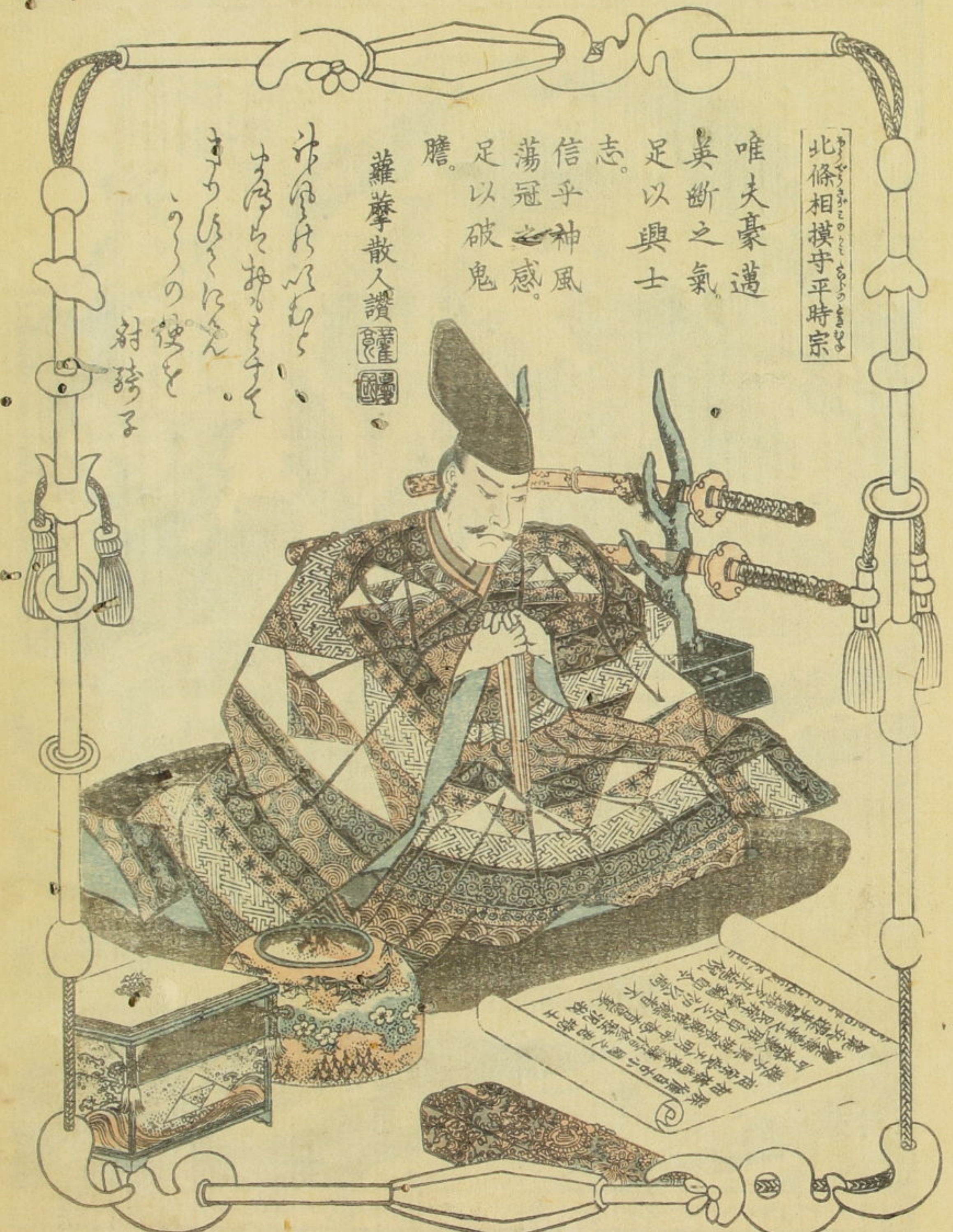
蕩冠之感

足以破鬼

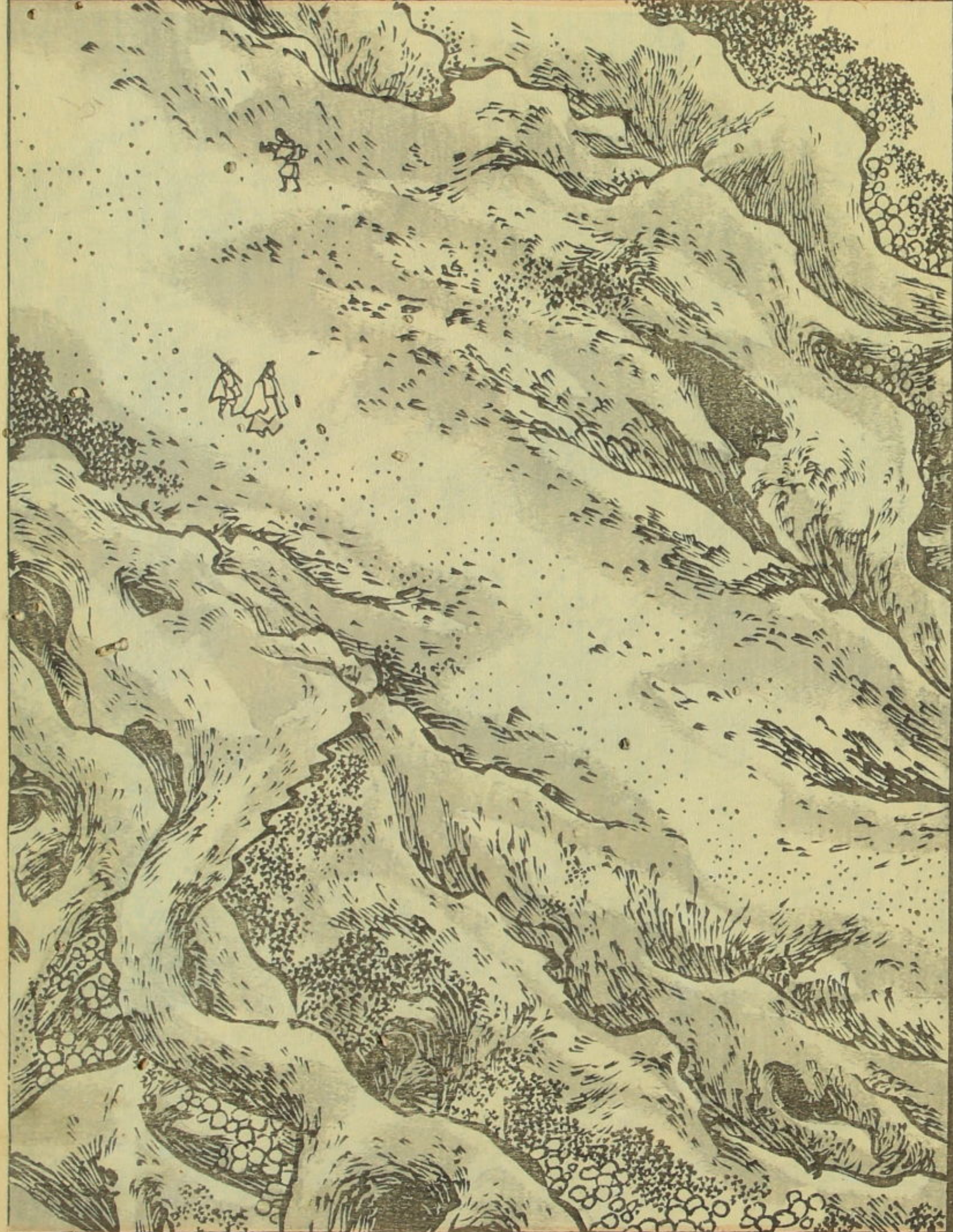
膽

羅摩散入讚

射狩子



天竺國之南境也



毛 83 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄

天竺國之南境也



景行天皇の御宇の
橋檀の櫛木の御木
の棹橋を人の階る圖

毛 83 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄 迄

之 六 須 見 八 心 多 世 了 子



美 与 云 武 与 与 与 与 与 与

寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸 寸



保 洽 与 与 与 与 与 与 与 与 与 与 与 与 与 与 与 与

此歌の
さかひ
いふ
助
里
樟
り
つ
り
紀
佐
つ
通
音
也

千(都) 〇〇 〇〇 (知) 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 (多) 〇〇 〇〇 (曾)



檀くわん木ぼくの上かみと
百寮ひやくりやくの踏ふみく往来わらいと
時人ときひとの視みくよる歌うた

朝霜あさしもの
御木みぎのさ小橋せうきやう
群臣ぐんしん

い度いとららずずも
御木みぎのさ小橋せうきやう

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇



景行天皇けいこうてんかうの御宇ごう
十二年日向の國むかひのくにあり

熊襲くまざい叛かへて朝貢あそくわんを奉たてまつらさば
天皇てんかう御身ごみみみづく筑紫つくし小行幸せうぎやう


すくくあれを征平せいへいさむひく筑紫つくしの
御木みぎといふ地ちは行宮ぎやうきやうを造つくらせと留居るまさまふ

此地このち小大せうだいなる歴木れきぼくあり其長そのなが九百七十丈朝日あさひの暉ひかりに

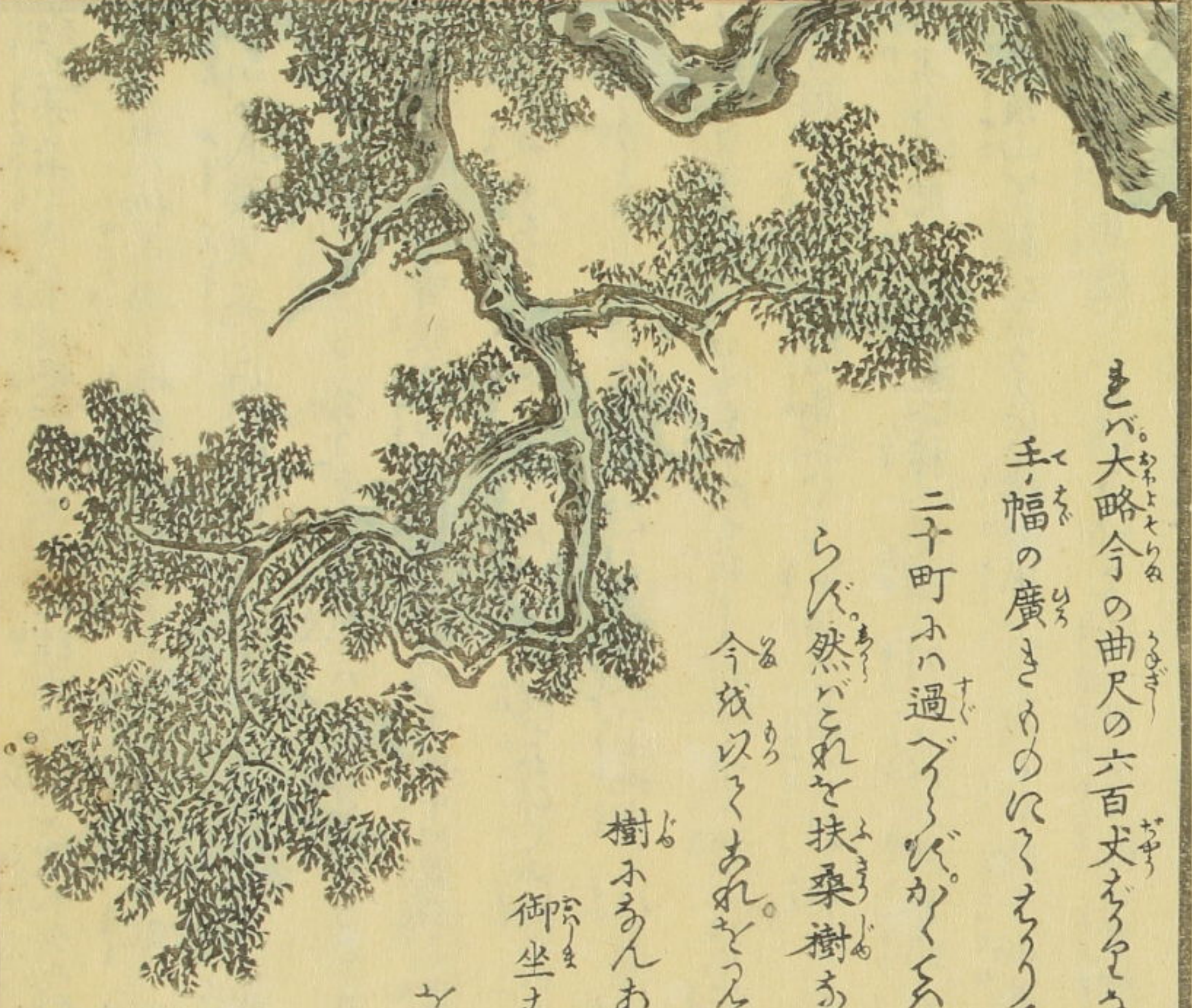
杵島山きりしまやまを隠かくし夕日ゆふひの暉ひかりも肥後ひごの阿蘇山あそやまを覆おほせり土人とここの樹きを神木かみき

ありといふくその地の名このちのなをも神木かみきといふべしとをあるる此の樹このきをあれと構かみと

〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇



僵こふけじど。そのあらはらた家いえ宅たちもあらはらぶらけしく人ひとを損となしてはならむはらしりあり。まの木に上りて
 ぞあらはらぶらの崗を超川がを涉の勞もあらはらぶらくて便りくてすべし。まの土
 人ひとつららはくれを踏く往來きはらう。神木の棹せう橋を呼ひいふ
 あり。さく我邦わ上し古この尺度の起おけ手を握五ご指しと十六ろく
 次つ並なる。その數か十じゆとれと十結けつ百ひやく結けつといふも小こ左さ右ぎゆうの
 手てを伸けひろげらう一いつ尋しゆんの長と同。この繩なを八十はちじゆ
 結む百ひやく結む一いつ尋しゆんとぬるを出し雲う風ふう上じやう記きふりここ
 といふ。漢土つちにく八はち尺せふを尋といふのと同。自みづか然ぜる。尺度の小こ
 太古たうこの手負ぢ帆はん命めい彦ひこ挾さ知ち命めい。天あめの御量りやうを造らせと
 瑞みづか殿でんと造らせとある。こは神の名いこの尺度の徳とくを表せりののにく
 太古たうこの十握じゆ劍けん八はち握じゆ劍けんあらず。この手度りとその尺をいつらり。今
 試しふ尋常じやうじやうの人は手量りやうを以てこは歴木れきの長九きゆう百ひやく七しち十じゆ丈ちやうを算
し



まいの大略りやく今いまの曲尺せふの六百ひやく丈ちやうをあらはぶ。十六じゆ七しち町ちやう許しよの高さたり。手
 幅あの廣さをののにくもらうても。七百ひやく丈ちやう餘りゆうあらはらぶ。れば稍
 二十にじゆ町ちやうの過ぐらひかく。漢土つちの長さを得う得う
 らは。然しかれどを扶桑ふさう樹じゆあらはらはらひひがから。されど
 今いまはいつもあらはらぶ。この實はい實じやく不ふ怪あや異いまらはらむ。まの太
 樹じゆあらはらはらりけん。天皇てんわう高かう田でんの行宮ぎゆうに
 御ご坐まさらはられ。百寮ひやくりやうままの樹の上
 と踏て往來きはらう。成時じやうじの人乃の
 今いま。御ご木の棹せう橋を呼ひいふの歌
 と詠ならし。此地の今いまの
 筑ちく後ご國こく三さん池ち郡ぐん高かう泉せん
 村むらの舊跡の今いまも現小の

残て其土中より木理堅實とこれを往古の歴木の埋木と云ふと思へこの城とて堀得るとい
てその地に御幸橋と呼なはところあれ三木の御木と詠り高泉の高田と詠まるあわわんと
柳川の武藤陳亮といふ人中島廣足が歴木辨の序に記するその國は人なればいづれか
左もあはれと思つて我邦へ土地豊沃なること異方に超れば人少く田畠も多し
さう頃ふその膏腴する所の生氣がのびく地中に盈溢く世界に希なる大木も多く生繁たつが
人漸く衆くありて地氣を稟う物増多に従てかひく橋わたるも殊更不斫せたりて残りの少
くたうゆきりのろろさうさうとこれ歴木の土地廣く住人も多しぬ筑紫の地をさうと云ふ
景行天皇の御宇まむもかを残て在りのろろさうさうと云ふ仁徳天皇の御宇に斬せしむり
樹の影乃且日お淡路島をかむ夕陽お高安山を越たりと古事記に云へるも其大歴木
小方らば肥前風土記に樟の大樹の朝日影お杵島郡の蒲川を蔽ひ暮の日影お養父郡
の草積山を蔽ひつらとひ播磨風土記に明石驛御手御井の楠は朝日お淡路嶋を蔭し
夕日お大和島根をくくひとひまゝ近江國栗本郡の栗樹の圍は五百尋ありてその影の朝日

丹波國おさう夕日お伊勢の國さすお忍に偶その邊お住居せ農民の田畠この栗樹の蔭
小覆りして成實さしうへ嘆申す伐せられりて今昔物語に記すわかれ此歴木小方ぬ
樹の處おありを明き今世も下野國如寶山の蔓延松といふ南の三谷を越北七谷お
蔓延すそれ幹の在河を知らぬといふ況深山幽谷人の到らぬあつらふ大樹乃
今に存するものぬべしといふものも歴木を扶桑木なりといふ實は僻言あること先人も
既にこれといふものあり扶桑木の殊々勝て大なること東方朔十洲記に有榭樹長者數千
丈大二千餘圍而同根偕生更相依倚是以名扶桑といふ枝と枝と交り倚て延ゆるは
あて一樹のここのまゝわら榭樹多くありて且その最長きもの數千丈ありて物のあはれ
漢主お我邦を扶桑國ともいふ此榭といふ桑といふをかり人を扶桑といふはさう
桑樹のここのまゝ淮南子も日出于暘谷浴于咸池拂于扶桑是謂晨明といひまゝ
日と木とを合せて日出く木中お在て形容く東字を製し日升く木上お在て以て
杲字と詩にも杲と出日と詠反景桑榆の間を照る残日の木下お在て杲と香の字

とせし如き悉皆扶桑樹の字を製せしを説文の段王裁が説ふ所のこれ扶
桑木の在り所筑紫の西邊あり殊小勝なる大樹あり故に漢土より遼小望見する
所の知るところに山海經に流沙三百里至于魚臯之山南望切海東望搏桑など
のひ其他の賦あり臨覽するを詠しるをかりはるの高さ此歴木の類ありていささ
なる大樹ありやありけん今ありてこれを知らずもわづらむと十州記に數千丈とある數を三以
上七以下といふとゆるみ從てこれを漢の世に尺度ありて算をば今の三里の餘なりかむと百餘
と四のつゝ累するやらの高さありてはれは漢土よりいささなりはれはこと木は从ひ日
从て文字を製せしる然る所の遼小瞻望すること明か知るものありて三十韻の
首小東は字の位せしもまこと不思議の神理ありてわりのりて左も右にも我
邦國土の他小勝もするはれられ事小据も察し知るをたりのありてや

日本國開闢由來記首卷終



